

フランス語の「動詞+副詞的形容詞」表現と強意の副詞

serrer fort、parler fort、aller fort の場合

Les expressions « verbe + adjectif adverbial » et l'adverbe intensifieur

en français

le cas de « serrer fort », « parler fort » et « aller fort »

関 敦彦

SEKI Atsuhiko

東京外国語大学博士後期課程

Doctoral Program, TUFS

ふらんぼー(Flambeau) vol.46 2020, p.77-96.

原稿受理 2020-11-29 ; 最終版 2021-02-10

抄録

フランス語における副詞的形容詞には、いくつかの統語的制約(Abeillé et Godard 2004)や語彙的制約が見られるが、この点を踏まえると、これらの語を含む表現は程度の差こそあれ慣用句的表現であると考えられる。本論文では、G.Gross(1996)等が提唱する凝結の概念を援用し、「動詞+副詞的形容詞」表現で出現する強意等を示す副詞の頻度と表現の凝結度との関連性を分析する。調査対象語彙として、フランス語で最も出現頻度の高い形容詞の一つである fort を選択した。

Summary (Résumé)

On peut considérer que les expressions « verbe + adjectif adverbial » sont figées en tenant compte d'une part des restrictions syntaxiques qu'ont relevées Abeillé et Godard (2004) et d'autres part des restrictions lexiques. Cet article a pour objectif d'analyser la relation entre la fréquence d'un adverbe intensifieur qui apparaît dans l'expression « verbe + adjectif adverbial » et son degré de figement. Pour réaliser l'analyse, nous avons choisi l'adjectif « fort ».

キーワード : フランス語、副詞、形容詞、凝結表現

© ふらんぼー Flambeau 46 (2020) pp.77-96.

183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 東京外国語大学フランス語研究室

183-8534 French Section, Tokyo University of Foreign Studies, 3-11-1

Asahi-cho Fuchu City, Tokyo

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY)下に提供します。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>



はじめに

現代フランス語では、付加形容詞から副詞を派生する場合は、形容詞の女性形に接尾辞-ment を付加することが一般的である。しかしながら、一部の形容詞は接尾辞を伴わず副詞的に使用することが可能である。例文(1)では fort は ligne を後置修飾し「直線」という意味を表している一方で、例文(2)では droit は主語である代名詞 je や斜格目的語である le frigo を修飾しているわけではなく、aller の経路が「まっすぐ」であるという意味を表しており、いわゆる副詞的な用法で出現していると考えられる。本研究では、形容詞の形態を保ちつつも副詞的な用法で使用される語彙を副詞的形容詞と呼ぶ。動詞に副詞的形容詞が後置される表現(以下『「動詞＋副詞的形容詞」表現』と呼ぶ)は、以下で説明するように、表現によって程度の差があるものの慣用句的表現であると考えられる。

(1) C'est la ligne droite ou tout au moins c'est le chemin le plus direct, le plus logique pour aller, venant du sud, très vite en Suisse sans se montrer et sans se faire prendre.

「これは一直線の道、いや少なくとも南から来てスイスまで目立たず、襲撃もされずに素早く行ける最短で最も理にかなった道である。」

(GIONO Jean, *Le Déserteur*, 1966, p.195)

(2) Je suis allé tout droit vers le frigo et j'ai sorti quelques trucs sur la table.

「私は冷蔵庫にまっすぐ向かい、いくつかの食べ物をテーブルに出した。」

(DJIAN Philippe, *37°2 le matin*, 1985, p.257)

1. 副詞的形容詞について

1.1. 副詞的形容詞の定義

本研究では「副詞的形容詞」と呼ばれる要素を扱うが、まずはこれを定義する必要がある。本研究では副詞的形容詞を以下のように定義する。

動詞句内で使用される形容詞のうち、他動詞が必要とする目的語として、または属詞として用いられないものを副詞的形容詞と呼ぶ。

上の定義は消去法的な定義ではあるが、この定義をさらに詳しく説明してゆく。まず、動詞句内で使用される形容詞の用法を概観する。フランス語において動詞句内で使用される形容詞の用法を Abeillé et Mouret(2010)をもとに以下のように整理した。

- 主語属詞(attribut du sujet)
- 目的語属詞(attribut de l'objet)
- 直接目的語(objet direct)

- 斜格補語(*complément oblique*)
- 付加語(*ajout*)

1 番目の用法は例文(3)で見られるような主語の属詞を表す用法である。この用法では形容詞は主語の性数に一致し、主語の性質や属性を示す。2 番目の用法は例文(4a)で見られるような目的語の属詞を表す用法である。この用法でも、形容詞は目的語の名詞の性数に一致するほか、例文(4b)のような言い換えが可能である。3 番目の用法は例文(5a)で見られるような他動詞が必要とする直接目的語として機能する用法である。このような用法では、形容詞は一般的に例文(5b)のように疑問代名詞 *que* で置き換えることが可能である。4 番目の用法は例文(6)で見られるような斜格補語を表す用法である。この用法では形容詞は動詞が表す動作の様態や数量表現、位置などを表しているが、動詞が必要とする要素であると考えられ、これを削除すると文が容認されなくなるものである。5 番目の用法は例文(7)で見られるような付加語的用法である。この用法では形容詞は上の斜格補語と同様に動作の様態や数量表現、位置などを表すが、あくまでも付加的な要素であり、仮に削除されたとしても文を容認することが可能である。

(3) Puisque les Inscriptions sont *gratuites*, je vais m'inscrire à la fois au Droit et aux Lettres.

「登録は無料なのだから、私は法学部と文学部両方に登録します。」
(BAZIN Hervé, *La Mort du petit cheval*, 1950, p.74)

(4a) Firmin ne surveillait pas Thérèse. Il la croyait *bête*.

「フィルマンはテレーズを警戒していなかった。彼は彼女を馬鹿だと思っていた。」
(GIONO Jean, *Les Âmes fortes*, 1950, p.347)

(4b) Il croyait qu'elle était *bête*.

(5a) Chez nous, on mange *français*. Le soir, c'est pas la minestre, chez nous, c'est la soupe poireaux-pommes de terre.

「我が家ではフランス料理を食べる。夜は我が家ではイタリア風スープではなくポロネギとじゃがいものスープだ。」(CAVANNA François, *Les Ritals*, 1978, p.246)

(5b) Qu'est ce qu'on mange ?

「何を食べますか？」

(6a) Il est allé très *haut* pour éviter le ravin.

「彼は溪谷を避けるべくかなり上の方に行った。」
(GIONO Jean, *L'Iris de Suse*, 1970, p.404)

(6b) ***Il est allé pour éviter le ravin.**

(7) **Et Nathan parla *bas et clair* sur un ton où ne perçait nulle ironie : (...).**

「そしてナタンは小さな声ではっきりと、皮肉ではない調子で話した(中略)。」

(LANZMANN Jacques, *La Horde d'or*, 1994, p.135)

本研究では上で取り上げた 5 つの用法のうち、他動詞が必要とする目的語でも属詞でもない用法、つまり例文(6)、(7)のような斜格補語と付加語にあたる用法の形容詞を扱う。

なお、副詞という概念は「品詞のごみ箱」と呼ばれることもあるように、非常に多くの要素を寄せ集めたものであるが、本研究で対象とする語彙は動詞の様態や数量表現を示すものが多い。そのことから、本研究で取り扱う形容詞は一般的に例文(8)や(9)のように代名詞 *comment* や *combien* で置き換えることが可能である。しかしながら例文(10)のような慣用句的に使用されると考えられる表現の一部ではこのような置き換えは不可能である。

(8) **A : Elle parle *comment* ?**

「彼女はどのように話しますか？」

B : Elle parle *si bas* que souvent on ne l'entend pas.

「彼女はとても小さい声で話すので、時々聞こえないことがあります。」(筆者作例)

(9) **A : Tu as payé *combien* ?**

「いくら払いましたか？」

B : J'ai payé *cher*. 60 euros.

「高かったです。60 ユーロでした。」(筆者作例)

(10) **A : *Quand Paul est en difficulté, il n'en mène pas *comment* ?**

「*ポールは困難な状況だと、どう付く？」

B : Il n'en mène pas *large*.

「彼は怖気付いちゃうね。」(筆者作例)

このように、表現によって代名詞化が不可能なものが見られるものの、副詞的形容詞は動詞の様態や数量表現を示す要素として機能するものが多いと考えられる。

1.2. 副詞的形容詞という呼称および統語的制約

ここでは本研究で扱う語彙を「形容詞」と呼ぶ理由について説明したい。本研究で「形容詞」という呼称を採用する理由は 3 点挙げられる。

1 点目は形態的に形容詞と同じ形態であることである。上でも取り上げたように、一般的に形容詞から副詞的語彙を派生させる場合は、形容詞の女性形に接尾辞 *-ment* を付加して派生されるが、本研究で扱う語彙はそのような形態をとらない。

2 点目は多くの副詞と比べ、文中で出現できる位置に制約が見られることである。例えば、Abeillé et Godard(2004)によると、副詞的形容詞は例文(11)のように、完了時制における副詞の一般的な出現位置である、助動詞と過去分詞の間に出現することができない。

(11) *Paul a *cher* payé cette erreur.

「ポールはその失敗に大きなつけを払った。」(Abeillé et Godard 2004 : 211)

さらに、副詞の中でもとりわけ音節数の少ない語彙は不定詞の左方に出現することができるが、副詞的形容詞は音節数が少ないものでもこのような位置での出現が容認されない。

(12) *Est-ce qu'il compte *lourd* peser sur sa décision ?

「彼は決定に影響をおよぼすつもりなのだろうか？」(Abeillé et Godard 2004 : 212)

また、副詞的形容詞は他の何らかの副詞的要素によって修飾されていない限り、分裂構文によって左方転移ができないという点も挙げられる。分裂構文は Blanche-Benveniste(2002)、Sabio(2014)でも動詞と文中の要素の間を確認するための統語テストとして使用されており、分裂構文によって左方転移できない副詞的形容詞は、接尾辞-ment を伴う副詞など一般的な副詞的要素とは文中における統語的ステータスが異なる可能性が考えられる。

(13) *C'est *cher* que Paul a payé cette erreur.

「ポールがその失敗に払ったのは大きなつけた。」(Abeillé et Godard 2004 : 214)

以上の形態、統語的な差異に加え、これまでの先行研究が一貫して、本研究が対象とする語を「形容詞」と呼んでいる点も挙げられる。Adjectif adverbial(Noailly 1994)、Adjectif-adverbe(Hummel et Gazdik 2014)、Adjectif invariable(Abeillé et Godard 2004)、Adjectif invarié(Grundt 1972、Guimier et Oueslati 2006)と、これまでの研究では様々な呼称が与えられ、研究によって対象範囲が部分的に異なるものの、一貫して「形容詞」と呼ばれており、「副詞」として扱われた研究は管見の限りでは見当たらない。

上で説明した形態的、統語的、さらに慣習的な観点から、本研究では対象とする語を形容詞と呼称する。

1.3. 副詞的形容詞と語彙的制約

上の 1.2. では、複合時制における助動詞と過去分詞の間や、不定詞の左側に副詞的形容詞が出現できないということ、つまり副詞的形容詞が出現する表現には統語的制約があることを述べた。

ここでは、副詞的形容詞には統語的な制約に加え語彙的制約も課されることを示してゆく。例えば、例文(14a)では動詞 *payer* に形容詞 *cher* を後置させることで「高い金額を支払う」という意味が見られるが、ここで現れる形容詞 *cher* を例文(14b)のように同義語であると考えられる形容詞 *coûteux* で置き換えると容認することができなくなる。このように副詞的形容詞は同義語による範列を構成することが困難であるという特徴を指摘できる。

(14a) (...) **rendre service au personnel, c'est en particulier le payer *cher* pour un travail réduit.**

「従業員に貢献すること、それはとりわけ少ない仕事に対して高い給料を支払うことである。」(WILBOIS Joseph, *Comment fonctionne une entreprise*, 1941, p.5)

(14b) ***(...) c'est en particulier le payer *coûteux* pour un travail réduit.**

従来の言語学では、一般的に言語表現は語彙を文法規則にのっとり構成することで生み出されると考えられている。このような表現を「自由な連辞」¹と呼ぶが、副詞的形容詞が出現する表現は統語的な制約が見られるほか、同義語による範列を構成することが困難であるという特徴が見られる。そのことから、冒頭でも述べたように、本研究で取り扱う表現は自由な連辞ではなく、むしろ慣用句的な表現であると考えられることができる。

2. 凝結表現について

2.1. 凝結とは

上で述べたように、本研究は「動詞+副詞的形容詞」表現が慣用句的な表現であるという前提に基づき議論を進めてゆくが、分析に際して凝結という概念を援用する。G.Gross(1996)によれば、凝結表現と呼ばれる表現は以下の基準によって判断することができる。

- A) L'opacité sémantique (意味の不透明性)
- B) Le blocage des propriétés transformationnelles (変形の非容認)
- C) Non-actualisation des éléments (構成要素の非現働化)
- D) Blocage des paradigmes synonymiques (同義語範列の非容認)
- E) Non-insertion (挿入の非容認)

以上のように凝結の概念は統語的側面のみならず意味的、語彙的な側面も含めた複合的な要素が関連している現象であることが分かる。

また Lamiroy(2008)が指摘するように、上記の制約は全ての凝結表現に適用されるわけではないことに留意しなくてはならない。その結果として、G. Gross(1996)や

¹ 本研究では M.Gross(1982)が指摘するように、意味的な観点からしか制限されず、主語と補語が自由な分布を示す文を自由な連辞と定義する。

Mejri(2005)など凝結を扱う研究者の多くが認めるように、自由な連辞と完全に凝結した表現の間には凝結の度合いに応じた連続体が存在するといえる。

2.2. 副詞的形容詞と凝結表現

上記の G.Gross(1996)による基準を副詞的形容詞が使用される用例に当てはめて検討する。例えば、例文(7)では *parler* に *bas* が後置され、これらの動詞と形容詞の組み合わせで「小さい声で話す」という意味になる。形容詞 *bas* は一般的に位置的、質的に「低い」という意味を表し、声など音の強さを表す場合はごく少数の語彙と共起した時のみである²。しかしながら、例文(7)では *parler* と共起することで「小さい声で」という意味が生じていると考えられる。このように副詞的形容詞の中には、表現全体の意味が構成要素の元の意味から離れ意味的に不透明になっていると考えられるものがある。

(7) **Et Nathan parla *bas* et *clair* sur un ton où ne perçait nulle ironie : (...).**

「そしてナタンは小さな声ではっきりと、皮肉ではない調子で話した(中略)。」

(LANZMANN Jacques, *La Horde d'or*, 1994, p.135)

また、例文(12)や(13)で見られるように、副詞的形容詞は多くの場合で動詞の右方以外での出現が容認されない、つまり変形が容認されていないことが分かる。さらに例文(12)のように形容詞が指示する対象が現実世界に存在せず、要素が非現働化していると考えられる表現も存在する。

(12) ***Est-ce qu'il compte *lourd* peser sur sa décision ?**

「彼は決定に影響をおよぼすつもりなのだろうか？」(Abeillé et Godard 2004 : 212)

(13) ***C'est *cher* que Paul a payé cette erreur.**

「ポールがその失敗に払ったのは大きなつけど。」(Abeillé et Godard 2004 : 214)

さらに、例文(14b)のように形容詞 *cher* を同義語である *coûteux* で置き換えると文を容認することができなくなることから、同義語範列が容認されないことが分かる。

(14b) ***(...) c'est en particulier le payer *coûteux* pour un travail réduit.**

このように、全ての基準が全ての表現に等しく適用されるわけではないものの、副詞的形容詞が用いられる表現は自由な連辞ではなく凝結表現であることが言える。また、表現によって凝結の度合いに違いが見られるということが分かる。

フランス語の副詞的形容詞を凝結表現の観点から分析した研究としては Guimier et

² 例えば *à voix basse* という表現では「小さい声で」という意味になる。

Oueslati(2006)が挙げられる。この研究では、本研究と同様に副詞的形容詞が出現する表現を自由な連辞ではなく慣用句的なものであると仮定し、複数の統語テストを基にしてこれらの凝結度を分析している。

しかしながら、この研究では、統語テストを基に各表現の凝結度を分析したにとどまっておき、実際の用例に基づいた分析はなされていない。そのことから本研究では「動詞＋副詞的形容詞」表現は凝結表現であると捉え、実際の用例を基に分析してゆく。

2.3. 副詞的形容詞と強意の要素

関(2017)は動詞と副詞的形容詞の間には強意等を示し意味が動詞にかかる副詞が高い頻度で出現することを指摘している。

例えば、*coûter cher* という表現はこの研究の調査範囲では 320 例出現しているが、下記の表 1 のとおり、そのうち約 4 割にあたる 140 例において動詞と形容詞の間に強意や比較級を示す副詞的要素が出現している。

表 1 *coûter cher* における強意や比較級の要素 (関 2017:10)³

強意や比較級を表す要素	頻度
très	33 (10.31%)
plus	26 (8.12%)
moins	24 (7.50%)
trop	21 (6.56%)
si	13 (4.06%)
assez	8 (2.50%)
fort	5 (1.56%)
aussi	3 (0.93%)
de plus en plus	3 (0.93%)
extrêmement	1 (0.31%)
particulièrement	1 (0.31%)
terriblement	1 (0.31%)
sûrement	1 (0.31%)
合計	140 (43.75%)

また副詞的形容詞が用いられる表現の中には、例(15)の *aller tout droit*(まっすぐ行

³ 百分率による頻度の表記は本論文の執筆にあたって追記した。

く)のように副詞 *tout* を動詞と形容詞の間から取り除くと容認されない、もしくは意味が変わってしまう表現も存在している。そのことから、強意等を表す副詞は単に文字通り強意の意味を表すにとどまらず、副詞的形容詞を導入する要素として機能していると仮定できる。本研究では、強意を示す要素がどのような条件下でより頻繁に出現する傾向があるかという点に注目して分析する。

(15) Je suis allé tout droit dans la cuisine, j'ai sorti les trucs sur la table et je me suis activé.

「私は台所にまっすぐ向かい、テーブルに道具を取り出し、準備を始めた。」

(DJIAN Philippe, 37°2 le matin, 1985, p.160)

3. 研究の方向性

3.1. 研究目的

上では副詞的形容詞の特徴を概観し、「動詞＋副詞的形容詞」表現が凝結表現と呼ぶべきものであることを指摘した。さらに、動詞と副詞的形容詞の間には高い頻度で強意の副詞が出現することも述べた。これらの点を踏まえた本研究の目的は以下のとおりである。

本研究では、コーパスを用いて特に頻度の高い「動詞＋形容詞」表現を調査し、凝結の度合いと動詞と副詞的形容詞の間に出現する強意の要素の頻度に関連があるかを分析する。

本研究では複数の「動詞＋副詞的形容詞」表現の凝結度を検討するが、まず意味的な側面に注目し、その上で統語的、語彙的面で特徴的な制約がある表現はその点に関しても検討する。

3.2. 対象表現(形容詞)

副詞的に使用できる形容詞の語彙は少なくないが、本研究ではその中でも形容詞 *fort* に絞って調査および分析を行う。形容詞 *fort* を選んだ要因は以下の2点である。

- (i) 形容詞 *fort* のトークン頻度⁴が高い。
- (ii) 形容詞 *fort* と共起することができる動詞のタイプ頻度⁵が高い。

第一に、副詞的形容詞 *fort* のトークン頻度が高いという点が挙げられる。本研究に際

⁴ トークン頻度とは、表現自体の頻度を表す。

⁵ タイプ頻度とは、ある形式の中で置き換え可能な部分(ここではある形容詞と共起できる動詞)の種類数を表す。

して、筆者はフランス語の書き言葉のコーパスである Frantext⁶で形容詞 fort の出現頻度を確認したが、形容詞 fort のトークン頻度は 11226 例であった⁷。形容詞 fort の出現頻度は副詞的形容詞として出現する語彙の中で最も高いものの一つであると考えられる。さらに、副詞的形容詞 fort は共起する動詞のタイプ頻度も高いということが言える。筆者が Frantext で調査した限りでは、375 の動詞と共起していた。副詞的形容詞は共起できる動詞のタイプ頻度が少ない、つまり範列が狭い場合が多いが、形容詞 fort に関しては例外的であるということが出来る⁸。

まず、形容詞 fort の意味がどのようなものであるかを確認する。この形容詞は多義的な語彙であると言えるが、TLFi によれば、以下のように大きく分類することができる。

- ① 物理的な力を示す (un homme fort、cheval fort、muscule fort など)
- ② 人間世界における行為の力を示す (Le Dieu fort、gouvernement fort など)
- ③ 知的・道義的な秩序の力を示す (un homme très fort、esprit fort など)
- ④ ある要素の程度が高いことを示す (chaleur forte、fromage fort、prix fort など)

上の分類を基に考えると、最も上に記述されており、かつ共起可能な名詞の数が多いと考えられる①の「物理的な力」がこの形容詞の中心的意味であり、そこから他の意味が派生していると考えられる。一方で、④の「要素の程度の高さ」を示す用法は、生物を示す名詞が共起できないなど共起制限が見られるほか、「高い金額」を示す prix fort や「強い意味の言葉」を示す parole forte の場合が顕著であるが、「物理的な力」という中心的な意味から離れていると考えられる。

3.3. 対象表現(動詞)

上で見たように形容詞 fort は非常に多くの動詞と共起することが可能であり、共起する動詞のトークン頻度は 375 である。当然ながら、ここで全ての動詞を扱うことは不可能である。そのため、本研究では Frantext 上での頻度を基に、とりわけ fort と共起する頻度の高い動詞に特に注目して調査を行ってゆく。今回調査した限りで最も頻度が高い動詞は以下の表 2 のとおりである。

⁶ 本研究では 1950 年から 2013 年までの小説(Roman)に該当する用例のみを検索対象としている。

⁷ 「動詞＋副詞的形容詞」表現として動詞の様態等を示す用法だけではなく、名詞句における用法など全ての用法における出現数である。

⁸ 例えば形容詞 cher は payer や coûter、形容詞 bon は sentir や tenir など少数の動詞とのみ共起する。

表 2 fort と共起する頻度が最も高い動詞

	動詞	用例数		動詞	用例数
1	serrer	246	11	souffler	49
2	parler	193	12	aimer	40
3	aller	139	13	taper	36
4	crier	132	14	cogner	33
5	rire	94	15	dire	31
6	battre	82	16	penser	31
7	respirer	70	17	appuyer	30
8	embrasser	68	18	tirer	28
9	sentir	66	19	gueuler	27
10	frapper	58	20	tenir	27

上の表 2 では形容詞 fort と共起する頻度が最も高い 20 の動詞を示した。本研究ではその中でも特に頻度が高い動詞 **serrer** と **parler**、**aller** と形容詞 fort との組み合わせに注目して分析を行う。

3.4. 分析方法

本研究では、コーパスを用いた分析を行うが、分析資料として Frantext を使用する。このコーパスは主に文学作品の用例を収録していることから、本研究が対象とする領域は書きことばのフランス語である。さらに、Frantext はジャンルや、著者、年代によって検索対象を細かく限定することができる。本研究では、1950 年から 2013 年(調査時点での最新データ)の間に出版された作品、かつ比較的用例数の多い小説(Roman)のジャンルに当てはまる用例を対象を絞って調査を行った。

4. 分析

4.1. serrer fort の場合

まず最も頻度の高い **serrer fort** であるが、この表現は例文(16)のように「強くつかむ」という意味、また人を表す目的語をとる場合は「強く抱きしめる」という意味になる。また用例数は fort と比べると極めて少ないものの、接尾辞-ment を伴う **fortement** によって置き換えが可能であり同様の意味をもたらすことができる。

この表現の凝結度を意味の観点から見たい。この表現において使用される動詞 **serrer** は中心的な意味で使用されていると考えられる。また形容詞 fort も 3.2. で見た意

味のうち最も中心的であると考えられる①の「物理的な力を示す」意味で使用されていると言える。以上の点を踏まえると、この表現は全体の意味が構成要素の意味から推測しやすく、構成的であると言える。

(16) **Elle serrait fort son sac à main et manquait de tomber à chaque tournant.**

「彼女はハンドバッグを強く握りしめていて、曲がり角ごとに転びそうになっていた。」

(GAVALDA Anna, Ensemble, c'est tout, 2004, p.15)

強意の要素の頻度について見てゆく。serrer fort という表現は今回調査した中では246例出現しているが、そのうち201例で何らかの強意の副詞や比較級の副詞が出現している。語彙ごとの頻度は表3のとおりであるが、最も頻度の高い副詞は très であり、つづいて比較級の副詞である plus、そして再び強意の副詞である si の順に続いている。

表3 serrer fort における強意や比較級の要素

強意や比較級を表す要素	頻度
très	104 (42.28%)
plus	54 (21.95%)
si	21 (8.53%)
trop	11 (4.47%)
bien	4 (1.62%)
moins	2 (0.81%)
tellement	2 (0.81%)
un peu	1 (0.40%)
exagérément	1 (0.40%)
assez	1 (0.40%)
合計	201 (81.70%)

この表現では、246例中201例と全出現数の約8割の頻度で強意等の副詞が出現している。しかしながら、これだけでは副詞的形容詞が強意等を示す副詞を求めているとは言い切れない。「強くつかむ」という表現の意味自体が強意の要素を必要としている可能性も否定しきれないからだ。

そこで fort と意味的に競合し、接尾辞-ment が付加された **fortement** が出現する **serrer fortement** という表現の場合、どれくらいの頻度で強意等の要素が出現するかを確認したい。

表 4 serrer fortement における強意や比較級の要素

強意や比較級を表す要素	頻度
plus	2 (10.52%)
assez	1 (5.26%)
si	1 (5.26%)
合計	4 (21.05%)

serrer fortement は serrer fort と比較すると頻度が非常に低く、19 例のみ出現していた。そのうち serrer と fortement の間に強意等の要素が表れる例は約 2 割の 4 例であり、比較級を表す plus が 2 例、強意を表す assez と si が 1 例ずつであった。このことから接尾辞-ment を伴う fortement が出現する場合と副詞的形容詞である fort が出現する場合で強意等の要素の出現頻度が大きく異なり、やはり副詞的形容詞の出現と強意等の要素の出現には関連があると考えられる。

4.2. parler fort の場合

つづいて、parler fort である。この表現は例文(17)のように「大きな声で話す」という意味として使われる。また、parler fort における fort は à voix forte という前置詞句によって置き換えることも可能である。さらに、接尾辞-ment を伴う parler fortement という表現も存在しているが、この表現は parler fort と完全な同義語ではないので注意が必要である。parler fort が声の音量を示す意味であったのに対して、parler fortement は「意味の強い言葉を使って話す」という発話の内容を示す意味になる。

凝結度について見てゆく。この表現における fort は物理的な「強さ」を離れ、話し声の音量が「大きい」ことを示していることが特徴である。上の 3.2. では形容詞 fort の意味分類を説明したが、この表現における fort は④の「要素の程度の高さ」を示す意味に対応していると言える。このように fort が音量を示す用法は、parler など音声を発する行為を示す動詞に後置される場合のほか、rire、cri、explosion など同じく音声を発する現象を示す名詞を修飾する場合に限られ、共起制限があると言える。そのことから、parler fort という表現は、上で見た serrer fort と比較すると構成性の度合いが弱いと考えられる。

(17) **Tout le monde parlait fort comme si chacun avait eu quelque chose d'important à dire.**

「皆何か重要なことを話そうとしているかのように大きな声で話していた。」

(JARDIN Alexandre, Bille en tête, 1986, p.32)

つづいて、parler fort に出現する強意や比較級の要素の頻度について見てゆく。parler fort は 193 例出現しているが、そのうち 55%にあたる 107 例で強意等の要素が出

現している。語彙ごとの頻度は表 5 のとおりであるが、最も頻度が高い語は比較級を表す plus であり、つづいて強意の要素である très、そして trop の順に続いている。

表 5 parler fort における強意や比較級の要素

強意や比較級を表す要素	頻度
plus	33 (17.10%)
très	22 (11.40%)
trop	20 (10.36%)
si	12 (6.22%)
moins	10 (5.18%)
assez	5 (2.59%)
tout	3 (1.55%)
exagérément	1 (0.51%)
un peu	1 (0.51%)
合計	107 (55.44%)

さらに、parler fortement における強意等の要素の頻度とも比較したい。parler fortement は表 6 で記されているとおり全部で 6 例出現したが、そのうちの 33%にあたる 2 例で強意の要素が出現した。具体的には plus が 1 例、trop が 1 例である。しかしながら、上でも述べたように parler fortement は「意味の強い言葉を使って話す」という意味であり、parler fort と意味的に比較できるものではない。そこで parler fort における fort と意味的に対応する à voix forte という表現における強意等の要素の頻度も確認する。今回コーパス上で調査を行った限りでは à voix forte は 14 例出現した。そのうち、強意等の要素が出現した例は 1 例のみであり、出現した語は assez である。ただし、この表現と共起する動詞は parler に限らないことに注意されたい⁹。

⁹ parler に限った場合、出現数は 2 例であり、動詞と形容詞の間に強意等の要素が出現する例は見られない。parler 以外の動詞は reprendre が 3 例、appeler、dire、discuter、s'entretenir、se faire、finir、marquer、se plaindre、répondre がそれぞれ 1 例である。副詞 assez と共起した動詞は marquer である。

表 6 parler fortment における強意や比較級の要素

強意や比較級を表す要素	頻度
plus	1 (16.67%)
trop	1 (16.67%)
合計	2 (33.33%)

4.3. aller fort の場合

もう一つの表現である *aller fort* について見てゆく。この表現には 2 つの意味が存在する。まず一つ目の意味は例文(18)、(19)で見られるような「うまくいく」という意味である。また二つ目の意味は例文(20)で見られるような「過剰にする」という意味であり、この意味で使用される場合は中性代名詞 *y* を伴うことが特徴である。またどちらの意味においても、*fort* は接尾辞-ment を伴う *fortement* で置き換えることが不可能である。

これら 2 つの表現の凝結度を見る。前者の意味では形容詞 *fort* は中心的意味である「強い」という意味から離れて使用されており、動詞 *aller* との共起によってのみ全体の意味が導き出される、つまり構成性の度合いが弱いと考えられる。もっとも、この表現の意味は主語の状態を表していることから、動詞 *aller* が持つ意味とは近いと考えられる。また、共起できる語彙と、肯定否定の分布に偏りがあると言える。例えば、*aller fort*(うまくいく)は計 100 例出現するが、そのうち 63 例で *ça* や *cela*、*ce* または非人称の *il* が主語として出現しており、共起する語彙に偏りが見られる。また、例文(18)や例文(19)のように否定文で使用される用例が 100 例中 76 例を占めている。したがって、上述の *parler fort* と同様に形容詞のみが語の中心的意味から離れていると考えられるものの、*aller fort*(うまくいく)の方がより制約が大きく、より凝結した表現であると考えられる。

(18) Il s'installe avocat à Aubusson, mais à coup sûr ça n'alla pas fort.

「彼はオービュソンで弁護士になったが、確実にうまくはいかなかった。」
(PEREC Georges, *La Disparition*, 1969, p.209)

(19) Bonjour, dit Bastião. Il cogne à la vitre. Ça n'a pas l'air d'aller fort.

「こんにちは、とバスティアンは言う。彼は窓をたたく。誰もいないようだ。」
(GARAT Anne-Marie, Merle, 1996, p.15)

後者の意味でも、形容詞 *fort* はその中心的意味から離れて使用されており、さらに動詞 *aller* も移動や状態を示す意味とも離れており、構成要素から全体の意味を推測することがより難しくなっていると考えられる。さらにこの意味では中性代名詞 *y* が伴われるが、この代名詞は前置詞 *à* で置き換えることができず、さらに特定の位置を示しているわけではない。そのことから、後者の意味の方が前者よりも構成性の度合いが弱く、より凝結した表現であると考えられる。

(20) **Je me rendis compte que j'y allais un peu fort, mais M. Zaremba, piqué au vif, se redressa vivement.**

「ちょっと言い過ぎたと私は気づいた。しかし不意をつかれたザレンバ氏はすばやく姿勢を立て直した。」

(GARY Romain, *La Promesse de l'aube*, 1960, p.193)

つづいて動詞と形容詞の間に出現する強意等の要素の頻度を確認する。まず、*aller fort*(うまくいく)の場合について見てゆく。この意味での *aller fort* は全部で 100 例出現しているが、そのうち強意等の表現が出現する用例は 39 例である。最も多い語は *très* で 19 例、つづいて *un peu* の 8 例、*trop* の 7 例と続く。*aller fort*(うまくいく)に関して特徴的といえる要素は、*un peu* の出現比率が *serrer fort* や *parler fort* と比較して高いという点である。*serrer fort* では 0.40%、*parler fort* では 0.51%という頻度であったが、この表現では 8% の頻度で出現している。

なお、この表現に関しては *fortement* 等による置き換えができないことから、他の同義表現との比較は不可能である。

表 7 *aller fort*(うまくいく)における強意や比較級の要素

強意や比較級を表す要素	頻度
très	19 (19.00%)
un peu	8 (8.00%)
trop	7 (7.00%)
bien	3 (3.00%)
si	2 (2.00%)
合計	39 (39.00%)

最後に、*aller fort*(過剰にする)の場合について見てゆく。この表現は計 39 例出現し、そのうち 24 例で強意等の要素が出現している。最も多い語は *un peu* の 17 例であり、つづいて *trop* の 5 例である。上では、*serrer fort* と *parler fort* において *un peu* の出現頻度が低い一方、*aller fort*(うまくいく)では *un peu* の出現頻度が高いことを指摘したが、*aller fort*(過剰にする)は更に *un peu* の頻度が更に高く、43.59%の頻度で出現している。

また、この表現も *fortement* 等による置き換えができないことから、他の同義表現との比較は不可能である。

表 8 aller fort(過剰にする)における強意や比較級の要素

強意や比較級を表す要素	頻度
un peu	17 (43.59%)
trop	5 (12.82%)
plus	1 (2.56%)
si	1 (2.56%)
合計	24 (61.54%)

5. まとめ

各表現における強意等の要素の出現数と、全体に占めるその割合は以下の表 9 のとおりである。強意等の表現の出現割合が最も高い表現は *serrer fort* で頻度は 81.71% である。つづいて *aller fort*(過剰にする)で頻度は 61.54%、そして *parler fort* で頻度は 55.44%、最後に *aller fort*(うまくいく)で 39%と続く。

表 9 各表現における強意や比較級の要素のまとめ

表現	強意出現数/全出現数	強意の割合(%)
serrer fort	201/246	81.71
serrer fortement	4/19	21.05
parler fort	107/193	55.44
parler fortement	2/6	33.33
aller fort(うまくいく)	39/100	39.00
aller fort(過剰にする)	24/39	61.54

上の表 9 では、各表現ごとの強意等の要素の出現比率を見た。ここまで、強意の要素および比較級に関する要素を全てまとめて扱ったが、これらの要素の中には文全体の意味的な面から要求される要素も多く含まれていると考えられる。特に比較級の要素である *plus* や *moins* などはその傾向が強いと予想される。ところで、上で見たように、「まっすぐ行く」という意味の表現 *aller tout droit* は必ず副詞 *tout* を必要とするが、この *tout* は強意の要素として最も出現数が高いものである。これらの点を踏まえると、元の意味が漂白され、副詞的形容詞を導入する要素として機能する可能性のある語は、頻度の高い語であると考えられる。また、本研究で調査している表現の中では強意の要素として *tout* は出現せず、*très* が最も頻度の高い語であると言える。そのことから、下の表 10 では各種強意等を表す副詞のうち *très* のみを選び出して、その出現割合を検討する。

表 10 では *serrer fort*、*parler fort*、*aller fort* の各表現の凝結度と強意の要素 *très* の

出現割合を示している。最も très の出現割合が低い表現は aller fort(過剰にする)であり très の出現がない。つづいて parler fort の 11.4%、aller fort(元気である)の 19%と続き、très の出現頻度が最も高い表現は serrer fort であり全体のうち 42.28%で出現する。

表 10 各表現における très のまとめ

表現	凝結度	très/全出現数	très の割合
aller fort(過剰にする)	高い	0/39	0
aller fort(うまくいく)	中程度	19/100	19.00
parler fort	中程度	22/193	11.40
serrer fort	低い	104/246	42.28

これらの点を踏まえると、全体の意味が形容詞 fort と動詞 aller とも離れている aller fort(過剰にする)では très の頻度が極度に低い(出現しない)一方、全体の意味が比較的構成的であり、今回調査した限りで最も凝結度が低いと見られる serrer fort では très の出現頻度が高い。つまり、より凝結度が低い表現ほど très の出現を必要とし、凝結度が高い表現ほど très の出現を必要としない、もしくは出現が容認されない可能性が想定されるように思える。しかしながら、全体の意味が形容詞 fort の中心的意味から離れている parler fort および aller fort(うまくいく)では、très の出現頻度がともに中程度であるものの、凝結度が比較的低いと考えられる parler fort よりも凝結度が比較的高いと考えられる aller fort(うまくいく)の方が très の出現頻度が高い。このことから、必ずしも凝結度のみが強意の要素の頻度を決めるわけではなく、動詞の意味など他の要素が関与する可能性が高く、凝結度以外の要素も考慮に入れる必要がある。

6. おわりに

本研究では書きことばのコーパスでの実例調査を実施し、serrer fort、parler fort、aller fort という 3 つの表現に関して、動詞と形容詞の間に出現する très など強意等の表現の出現頻度に注目して分析を行った。その結果、表現全体の意味の構成性の度合いによって強意等の要素の出現頻度が変わり、凝結度が低いほど頻繁に出現する傾向があると考えられる。しかしながら、中程度の凝結度の表現のうち、凝結度が比較的低いと考えられる parler fort よりも凝結度が比較的高いと考えられる aller fort(うまくいく)の方が très の頻度が高い点を踏まえると、凝結度のみが強意等の要素の出現頻度を決める要素ではないことは明らかであろう。また、本研究で扱った「動詞＋副詞的形容詞」表現が強意等の要素を要求するわけではなく、形容詞 fort 自体が強意等の要素を必要としている可能性も考えられることから、今後は名詞を修飾する fort に強意等の要素が出現する頻度も確認する必要があるように思える。

参考文献

- ABEILLE, Anne et GODARD, Danièle. (2004). Les adjectifs invariables comme compléments légers en français, *L'adjectif en français et à travers les langues*, Caen : PUC, 209-224.
- ABEILLE, Anne et MOURET, François. (2010). Les compléments adjectivaux des verbes transitifs en français, *Les Tables, La grammaire du français par le menu, Mélanges en hommage à Christian Leclère*, Cahier du Cental, Louvain-la-Neuve : Presses universitaires de Louvain, <http://www.llf.cnrs.fr/Gens/Mouret/AA-FM.pdf>.
- BLANCHE-BENVENISTE, Claire. (2002), La complémentation verbale: petite introduction aux valences verbales, *Tranel*, 37, 47-73.
- DELSAUT, Maxence. (2013). La tradition corsète-t-elle la question de l'adjectif invarié jusqu'à un point de non-retour, *Travaux de linguistique*, 67, 25-60.
- DUBOIS, Jean et al. (1994). *Dictionnaire de linguistique et des sciences du langage*, Paris : Larousse.
- FRASER, Bruce. (1970). Idioms within a Transformational Grammar, *Foundations of language*, 6, 22-42.
- GROSS, Gaston. (1988). Degré de figement des noms composés, *Langages*, 88, 57-72.
- GROSS, Gaston. (1990). Définition des noms composés dans un lexique-grammaire, *Langue française*, 87, 84-90.
- GROSS, Gaston. (1996), *Les expressions figées en français – Noms composés et autres locutions*, Paris : OPHRYS.
- GROSS, Maurice. (1982). Une classification des phrases "figées" du français, *Revue québécoise de linguistique*, 11, n° 2, 151-185.
- GRUNDT, Lars Otto. (1972). *Études sur l'adjectif invarié en français*, Bergen: Bergen usw.
- GUIMIER, Claude et OUESLATI, Lassaad. (2006). Le degré de figement des constructions « verbe + adjectif invarié », *Composition syntaxique et figement lexical*, Caen : PUC, 17-37.
- HUMMEL, Martin. (2013). Attribution in Romance: Reconstructing the oral and written tradition, *Folia Linguistica Historica*, 34, 1-42.
- HUMMEL, Martin. (2017). L'accord adverbial en français, *Revue de sémantique et pragmatique*, 41-42, 181-205.
- HUMMEL, Martin. (2018). La structure 'verbe + adjectif'. *Parler vrai, dire juste, faire simple et compagnie*, *Revue Romane*, 53:2, 261-296.
- HUMMEL, Martin et GAZDIK, Anna. (2014). Le Dictionnaire historique de l'adjectif-adverbe : de *aimer haut à baiser utile*, *Actes du 4^e Congrès Mondial de Linguistique Française*, 587-603.
- LAMIROY, Béatrice. (2008). Les expressions figées : À la recherche d'une définition, *Les séquences figées : entre langues et discours*, Stuttgart : Franz Steiner Verlag, 85-98.
- MEJRI, Salah. (2005). Figement absolu ou relatif : la notion de degré de figement, *Linx*, 53, Presses universitaires de Paris Nanterre, 183-196.
- NOAILLY, Michèle. (1994). Adjectif adverbial et transitivité, *Cahier de grammaire*, 19, 103-114.
- NOAILLY, Michèle, (1999). *L'adjectif en français*, Paris : OPHRYS.
- NØJGAARD, Morten, (1992-1995), *Les adverbes français : essai de description fonctionnelle*,

Copenhague : Det Kongelige Danske Videnskabernes Selskab.

SABIO, Frédéric. (2014), *Syntaxe du français moderne : introduction à la syntaxe verbale*, Aix-en-Provence : Aix-Marseille université.

関敦彦. (2017).「現代フランス語において動詞に後置される形容詞」『言語・地域文化研究』23, 東京外国語大学大学院総合国際学研究所, 197-210.

関敦彦. (2018).「フランス語の副詞的形容詞に関するコーパス間の比較」『ロマンス語研究』41, 日本ロマンス語学会.

関敦彦. (2019).「フランス語の副詞的形容詞が出現する構文について《payer cher》の場合」,『ふらんぼー』44, 東京外国語大学フランス語学研究室フランス研究会, 83-102.

インターネット資料

Frantext (最終閲覧日:2020年11月29日)

<https://www.frantext.fr/>

Le Trésor de la Langue Française informatisé (TLFi) (最終閲覧日:2021年2月9日)

<http://atilf.atilf.fr/>